

翻訳における「名詞化」という文法的比喩

長沼 美香子

(通訳・翻訳者、大学講師)

This paper explores the possibility of bridging the gap between theory and practice in translation from the view point of Systemic Functional Linguistics (SFL), focusing specifically on nominalization. SFL regards language as a meaning-making resource which simultaneously has three metafunctions: ideational, interpersonal and textual. It is one of the most useful and powerful tools to analyze both source and target language texts ideationally, interpersonally and textually. SFL text analysis contributes to the understanding and the evaluation of texts, for which the translator constantly makes motivated decisions to make meaning. In this paper, I will firstly outline some relevant theories of translation studies and then move on to practical text analysis based on SFL to show how the grammatical metaphor of nominalization brings to the surface some challenges in translation between Japanese and English.

1. はじめに

本稿は選択体系機能言語学 (Systemic Functional Linguistics: 以下 SFL という) からアプローチする翻訳理論研究による一考察である。日本語と英語という二言語間の翻訳における理論と実践を橋渡ししようとするものであるが、翻訳上のノウハウ的な規則を提示して理論と置き換えることは意図していない。ここで論拠とするのは SFL に基づく言語理論である。その理由は、翻訳が対象とするのがテキストであるならば、そのテキストを分析するための理論としては言語学の理論が最も相応しいと考えるからである。テキストは社会や文化という環境のなかで機能しており、SFL ではコンテキストで意味を作り出す言語を社会的記号として探究する。

ここでの翻訳理論研究は、SFL を翻訳テキスト分析のツールとして応用する。翻訳が行われるプロセスで何が起こったのかを考察するためには、起点言語テキスト (source

NAGANUMA Mikako, "Grammatical Metaphor of Nominalization in Translation."

Interpretation Studies, No. 6, December 2006, Pages 15-28.

(c) 2006 by the Japan Association for Interpretation Studies

language text: ST) と目標言語テキスト (target language text: TT) の分析をする必要があるが、そのためのひとつの選択肢として SFL を選んだものである。日本語と英語を言語システムとして比較対照するのではなく、そのシステムが具現化された実際のテキストのなかでこの二言語がどのように使用されているかを分析する。このように実際に使用されている言語の分析から得られる成果としては、実践的な翻訳への応用のみならず、翻訳研究から言語学理論そのものへのフィードバックという貢献も考えられよう。

翻訳作品 (product) は翻訳者により生み出されるが、その翻訳プロセス (process) において、動機付けられた選択 (motivated choice) がなされている (Hatim and Mason 1990: 3-4)。そして、翻訳者が多様な選択肢から最適だと思われる候補を選び取るプロセスは複雑である。しかし、あるテキストにおいて、翻訳者がなぜそのような選択をしたのかを分析して説明できれば、経験則のみに依存しない翻訳教育への応用にもつながるであろう (長沼: 2005)。本稿では、まず前半で理論的な枠組みを概観する。そして、後半で具体的な日本語と英語でのテキストを分析して、文法的比喩と翻訳上の問題を考察し、翻訳理論研究の可能性を提示したいと思う。

2. 翻訳研究と SFL

翻訳の歴史は古いが、翻訳の理論研究は比較的新しい学問分野であるとされる (Munday 2001: 4-17, Baker 1998b: 277-280)。しかし、翻訳に関する文献では紀元前 46 年に遡ることもできる。そして、キケロ (Cicero: 46 BCE/1960 CE) が自らの翻訳観¹⁾を記して以来、およそ 2 千年もの間、翻訳についての記述には共通するテーマがあった。それは、直訳 (literal translation) か意訳 (free translation) かという二項対立の図式である。この繰り返される「不毛な」議論に終止符を打ち、翻訳という潤沢なりソースが提供する言語の諸問題を理論的に研究するまでの道のりは長かったと言える。

20 世紀半ばからの初期の翻訳理論研究のなかでよく知られているのは、等価 (equivalence) の概念である。たとえば、ナイダ (Nida: 1964) の “formal vs. dynamic”、ニューマーク (Newmark: 1981) の “semantic vs. communicative”、ベル (Bell: 1991) の “semantic vs. functional” などがある。これらは直訳か意訳かという二者択一とは異なり、翻訳が起点言語志向か目標言語志向かのどちらかに偏向して等価が追求されていると考える。しかし、等価という概念は、研究上中心的な概念であると同時に批判の対象でもあった (Kenny: 1998)。そこで、ベーカー (Baker: 1992) はこの等価という概念をキーワードとしながらも、“for the sake of convenience - because most translators are used to it rather than because it has any theoretical status” (1992: 5-6) として、語彙や文法レベルでの等価からテキスト形成的等価 (textual equivalence) や語用論的等価 (pragmatic equivalence) までを論じている。筆者も基本的にベーカーと同様の立場で、便宜上この等価ということばを使用することにする。本稿後半では、

SFLの言語モデルに基づいて、テキストのレベルまでを視野に入れてSTとTTがどのように等価を具現しているかについて、具体的な分析をする。

ここで、テキスト分析をするツールとして用いるSFLについて、翻訳研究との関連という限られた視点から概観しておく。SFLは、人類学者のマリノフスキー(Malinowski)や言語学者のファース(Firth)らの流れをくむロンドン言語学派のハリデー(Halliday)を中心とする言語理論である(Halliday: 1994, Halliday and Matthiessen: 2004, Matthiessen: 1995)。文化のコンテキスト(context of culture)や状況のコンテキスト(context of situation)という環境のもとで、言語は意味を作り出す(meaning-making)ための体系と解釈され、意味のしかた(how to mean)が選択される。つまり、“Systemic theory is a theory of meaning as choice, by which a language, or any other semiotic system, is interpreted as networks of interlocking options”(Halliday 1994: xiv)という立場である。機能主義(functionalism)に立ち、言語使用を研究の対象とするため、この理論の適用範囲は広い。そして、ハリデーは翻訳・通訳への応用(Halliday 1994: xxix)もそのひとつとして挙げている。SFLは英語をベースとして発展してきたが、近年では多言語の分析から言語類型論(Caffarel et al.: 2004)への流れのなかでも、翻訳研究が議論されている²⁾。

SFLの言語モデルを簡略に図式化すると、図1の通りである(Butt et al. 2000: 7をもとに筆者が加筆修正)。言語システムが、意味層、語彙文法層、音韻・書記層の3つに層化(stratification)し、さらにそれらの上位に状況や文化のコンテキストがある。そして、上位の層が下位の層で具現化(realization)され、下位の層は上位の層に包括されているという関係にあり、各層は有機的に結びついている。意味層に直接影響をあたえる状況のコンテキストでは、活動領域(field)、役割関係(tenor)、伝達様式(mode)という要素が使用域(register)を構成する。また、言語システムでは意味層において、観念構成的(ideational)、対人的(interpersonal)、テキスト形成的(textual)機能が言語のメタ機能として同時に3つの意味を作り出し、語彙文法層における意味のしかたで具現されている。この語彙文法層では、過程構成(TRANSITIVITY)、叙法(MOOD)、主題(THEME)³⁾などの選択体系網(system network)から選択された意味のしかたが具体的なテキスト(instance)を生み出す。翻訳研究が対象とするのも具体的な作品としてのテキストであるが、翻訳者がなぜそのような選択をしたのかというプロセスを解明するためには、3つのメタ機能やコンテキストを視野に入れた考察が必要である。

言語システムが3つのメタ機能を同時に有するのであれば、翻訳研究においてもこれらに等しく注目すべきである。しかし、マチスン(Matthiessen)の指摘にもあるように、従来の翻訳研究においては、観念構成的な言語機能、つまり経験的な意味の部分に焦点を当てる傾向にあったと言える(Matthiessen 2001: 96-97, Naganuma 2000)。

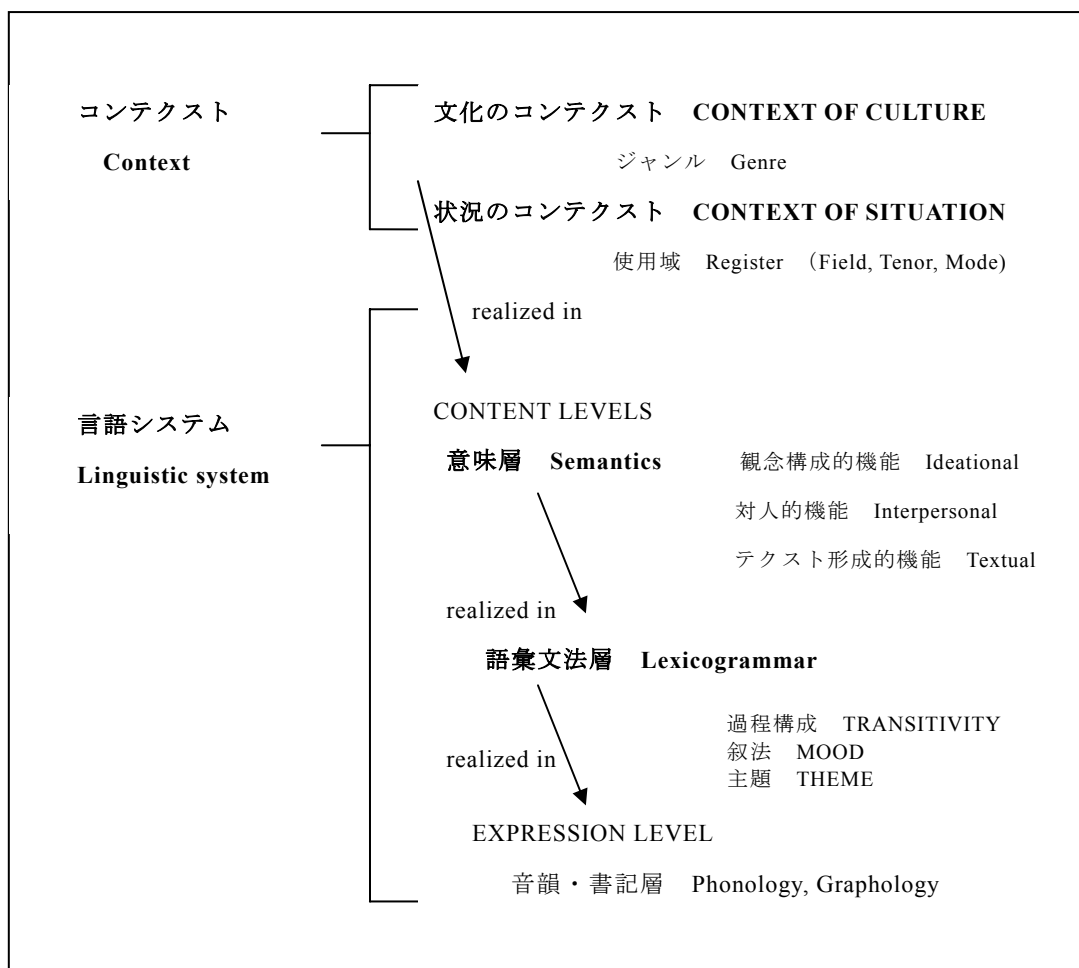


図 1：層化と具現化 (Stratification and Realization)

しかし、そこでは命題として「何」が訳出されているかが問題とされ、「誰」に対してのメッセージを、「どのように」テキストが構成しているのかが見落とされている。たとえば、レシピというテキストを例に考えてみよう。

[典型的なレシピの一部]

日本語： 豚肉は一口大に切る。

英語： Cut pork into bite-sized pieces.

「豚肉」(pork) という参与要素 (participant: goal) と「切る」(cut) という物質過程 (process: material) などが作り出す命題的意味は日本語も英語もどちらも同じであり、一連の手順を経て出来上がる結果としての料理内容も同一のはずである。しかし、対人的およびテキスト形成的意味には相違点がある。仮に日本語のレシピが「豚肉を一口大に切れ」あるいは「豚肉を一口大に切ってください」というような意味のしかたに変わり、英語のレシピが “As for pork, you cut it into bite-sized pieces.”

となれば、それぞれがレシピとしてのテキストの一部と見なされなくなり、レシピとしての機能を果たさなくなるかもしれない。それは、典型的なレシピにおける叙法および主題の選択が異なっているからである。日本語のレシピでは、叙述法 (declarative) で陳述し、「は」で対象 (goal) としての材料を主題化するのが一般的である。日本語の読み手は主題化された材料に焦点を当てて、料理の手順を踏んでいく。他方、英語では料理を作るという行為を命令法 (imperative) で指示し、その行為自体が主題としてテキストが展開するのである。英語の読み手はレシピというインストラクションにそって料理のステップを展開させていく。これをまとめると表 1 のようになる。

	日本語			英語		
		豚肉は	一口大に	切る	Cut	pork
ideational	Goal	Circumstance	Process: material	Process: material	Goal	Circumstance
interpersonal	Complement	Adjunct	Predicator Mood: declarative	Predicator Mood: imperative	Complement	Adjunct
textual	Theme	Rheme		Theme	Rheme	
?? 翻訳	<i>As for pork, you cut it into bite-sized pieces</i>			<i>豚肉を一口大に切れ</i>		

表 1：レシピのメタ機能

このように、言語システムの 3 つのメタ機能により意味が作り出されてコミュニケーションが成立するのであるから、異なる言語を扱う翻訳者はそれぞれの言語での意味のしかたを 3 つのメタ機能から選択していることに気づいていなければならない。

さて、次に意味層と語彙文法層との関係が一致しない文法的比喩 (grammatical metaphor) について、翻訳者の視点から考えていきたい。

3. SFL における文法的比喩

図 1 において、語彙文法層で選択された意味のしかたがその上位の意味層での選択と一致しない場合を SFL では文法的比喩という。ここで具現される意味は、それを典型的に表示する語彙文法とは異なる形式で表示される。つまり、意味と語彙文法が一致した (congruent) 場合とは異なり、比喩的 (metaphorical) なのである。ハリデーは次のように説明する。

In other words, for any given semantic configuration there will be some realization in the lexicogrammar – some wording – that can be considered CONGRUENT;

there may also be various others that are in some respect 'transferred', or METAPHORICAL. (Halliday 1994: 342)

文法的比喩には叙法にかかわる対人的比喩と過程構成にかかわる観念構成的比喩がある。前者は、たとえば“Could you open the window?”という疑問の形式を用いて、その意味は窓を開けるという行為を要求する命令である場合などが該当する。後者は、典型的には「名詞化 (nominalization)」である。つまり、一致した形式としては動詞で具現される意味を、テキストにおけるなんらかの理由により、比喩的に名詞で表示するという場合である。たとえば、“they add sugar”ではなく、“the addition of sugar”という名詞群を用いて「もの」として機能させる場合である。この名詞化という意味のしかたについて、ハリデー (1994: 352) は「文法的比喩を作り出す最も強力な語彙文法資源」と指摘している。

あるテキストにおいて文法的比喩が選択されることには意味がある。そこで、SFLの理論的枠組では、科学技術分野のテキストについての特徴や教育における言語の機能という面からの分析が行われている (Halliday and Martin: 1993, Simon-Vandenberg et al. eds.: 2003, Lassen: 2003)。科学技術をはじめとする学術知識を凝縮し蓄積しながらテキストを展開する上で、名詞化は有効であるが、同時に、主語や時制が欠落することで曖昧な表現となる。上述の“the addition of sugar”では、誰がいつ砂糖を加えたのかが不明である。このため、教科書などで多用されると学習者の理解を阻害する原因ともなり得るし、取扱説明書などでのわかり難さの一因とも考えられる。

SFLにおける文法的比喩の分析は主として英語の言語機能に基づいているが、日本語においても同様の語彙文法資源そのものは存在する。たとえば“the addition of sugar”に対して、「砂糖の追加」または「糖分の添加」という表現は日本語にもある。しかし、テキストにおいてそれが具現される程度や頻度は同じではなく、ここに翻訳者の選択が関与することとなる。時として、「砂糖を加えると」というように、名詞文から動詞文に解きほぐして (unpacked)、翻訳する場合もあるであろう。この場合は、日本語という言語システムとしては名詞化での表現という等価があるにもかかわらず、その具現されたテキストにおいては等価を選択することを阻害する要因があるのである。ただし、英語での名詞化を日本語に訳出する場合に、無条件で解きほぐすという従来からの方策に筆者は違和感を覚える。しかし、この議論を深めるためにもまず、日本語における名詞化を英語に訳出する場合を考察しておきたい。このようなケースについてはこれまでに先行研究がなく、翻訳と文法的比喩の問題に新たな視点を提示できると思うからである。名詞化という文法的比喩での意味のしかたが選択された理由をテキスト分析で解明することで、日英語間における翻訳の等価をどのように実現するかを具体的な事例で考えてみたい。

4. テキスト分析

ここで分析の対象とするのは、次の日本語の起点言語テキスト (ST) とその翻訳である。

1-1: ST

かけ込み乗車は、危ないのでおやめください。

これは、新幹線車内の座席前に設置された折りたたみ式テーブルの裏にある「車内のご案内」というメッセージの一部であり、書かれたテキストである。しかしながら、過日全く同一のアナウンスをある私鉄構内で耳にしたことがあった。どちらがオリジナルかはここでは問題ではないが、同一の書記テキストと音声テキストが存在するというのは、このテキストが日本語として使い勝手がいいことを示す証拠かもしれない。つまり、書いても話しても問題のない自然な日本語である。では、このテキストを英語に翻訳するとどのようなになるであろうか。そして、何が問題となるのか分析してみたい。

まず、状況のコンテキスト (context of situation) として、テキストの使用域 (register) の変数は次の表 2 のようにまとめられる。

活動領域 Field	公共交通機関での車内案内の一部。車内のレイアウトと合わせて、利用客の安全やマナーに関する行為に言及している。
役割関係 Tenor	公共交通機関を運営する会社からその利用客へのお知らせ。不特定多数の利用客に向けて、会社からお願いをしている。
伝達様式 Mode	一方向的な書き言葉（話し言葉としても使用される）。イラストも入ったマルチモーダルな掲示の一部として書かれている。

表 2：テキストの使用域

次に、「かけ込み乗車」の部分であるが、ここには 2 つの動作が含まれている。「かけ込む」と「乗車する」という行為が組み合わせられ、「かけ込みながら、(電車やバスなどに) 乗車する」という過程を名詞化で表現している。では、ここで名詞化をする理由は何であろうか。1-1 を仮に、名詞化を用いずに表現すると次のようになる。

1-2: ST'

危ないので、かけ込みながら列車に乗らないでください。

1-2 も日本語として問題はない。また、使用域における役割関係のみを変えて、たとえば、大人が幼児に「危ないから、かけ込みながら電車に乗らないのよ」などと注

意する場合にも、「かけ込み乗車」という名詞化は使用されないであろう。

では、どのような必要性からこのテキストでは名詞化が選択されているのか。そして、それは翻訳されたテキストにおいても等価となるのであろうか。結論から先に言うと、この名詞化はそのまま英語に翻訳されていない。車内案内に併記されている英語での翻訳は以下の通りである。

1-3: TT

For your safety, don't rush for your train.

このような車内案内が成立すること自体、文化のコンテキスト (context of culture) がとても日本的なものかもしれない。かけ込んで乗車しようとして怪我をしても自業自得であるとする文化ではこのような掲示そのものが成立しないであろう。これは異文化コミュニケーションの問題とも関連する。しかし、ここではこのテキストが書かれているのは日本の新幹線の車内であるので、日本の文化や社会という環境下での英語への翻訳という前提で考えていく。

1-1 と 1-3 を比較して、ST での名詞化「かけ込み乗車」の部分が、TT では名詞化されていないことがわかるであろう。この差異を説明するために、案内に掲示されている車内レイアウト以外の他のテキストを含めて全体のディスコースから考えることにする。

ST	TT
かけ込み乗車は、危ないのでおやめください。	For your safety, don't rush for your train.
不審物や持ち主のわからないお荷物は、直ちに乗務員までお知らせください。	Please notify the train crew immediately, if you find any suspicious items or unattended baggage.
携帯電話はマナーモードなどに切り替えてください。	Please switch your mobile phone to silent mode.

表 3 : 「車内のご案内 Information」のテキスト (車内レイアウトを除く)

ここで ST のテキスト展開が、「かけ込み乗車」「不審物や持ち主のわからないお荷物」「携帯電話」という 3 つの主題から構成されていることに気がつく。日本語における命令法は文末 (このテキストの場合は「ください」) によって明示されるため、主題の展開は叙法とは無関係である。そのかわり、助詞「は」でとりたてられた参与要素 (participant) がトピック⁴⁾として、主題の展開に寄与している。つまり、「かけ込み

乗車」という名詞化は、他の2つの「不審物や持ち主のわからないお荷物」や「携帯電話」と同様に、テキストを展開する上で参与要素となり主題化されるために必要な方策なのである。

それに対して、TTでのテキスト展開は、“For your safety” “Please” “Please” という対人的ないわばクッション部分に続いて、“don’t rush” “notify” “switch” という文頭の過程中核部 (process) が命令法を具現している。ここでの主題は名詞からなる参与要素ではなく、動詞からなる過程中核部が担うことで、ある行為を対的に要求することを明示した展開となっている。STとTTでのこのような主題展開をまとめると、表4のようになる。

	Theme	Rheme
ST	かけ込み乗車は	危ないのでおやめください
	不審物や持ち主のわからないお荷物は	直ちに乗務員までお知らせください
	携帯電話は	マナーモードなどに切り替えてください
TT	For your safety, don't rush	for your train
	Please notify	the train crew immediately
	if you	find any suspicious items or unattended baggage
	Please switch	your mobile phone to silent mode

表4:「車内のご案内 Information」における主題展開

このTTに見られる主題展開は、英語のように命令法の叙法が文頭で明示される言語においてのみ有効である。日本語のように叙法が文末に現れる言語では、このような主題展開をすることはできない。そこで、日本語では助詞「は」でとりたてられた要素が、主題としてテキストの展開に重要なのである。ちなみに、このTTを日本語に逆翻訳 (back translation) すると、STとの差異がより明確になる (表5)。

STと逆翻訳の日本語との差異はどのように説明できるであろうか。日本語を母語とする者の立場からは、どちらも言語としては「正しい日本語」と言っても良いと思われる。しかし、逆翻訳の場合には、個別の文は正しい日本語であるが、テキスト構成 (texture) という観点から見ると評価が変わる。助詞「は」によるとりたての主題がないので、トピックがはっきりしないのである。テキスト上の構成力がオリジナルのSTよりも弱いのではないかと思われる。公共交通機関の利用客が一読しただけで、情報が良く伝わるのは主題が明示されているテキストである。つまり、「かけ込み乗車」「不審物や持ち主のわからないお荷物」「携帯電話」の3点に関するお願いという主題でメッセージが構成されているほうが、明瞭でわかりやすい。

ST	TT の逆翻訳
かけ込み乗車は、危ないのでおやめください。	安全のために、列車にかけ込まないでください。
不審物や持ち主のわからないお荷物は、直ちに乗務員までお知らせください。	不審物や持ち主のわからないお荷物を見つけたら、直ちに乗務員までお知らせください。
携帯電話はマナーモードなどに切り替えてください。	携帯電話をマナーモードなどに切り替えてください。

表 5 : 「車内のご案内」の逆翻訳との比較

翻訳を評価する際に、何気なく「正しい日本語」や「自然な日本語」という表現が使用されたり、「日本語の原文に引きずられない英訳」というコメントが不用意になされたりしている。しかし、何が正しく自然であるのか、どうして引きずられると拙いのかは、そのテキストを分析して、主題一題述の展開も含めたテキスト全体から判断する必要がある。

5. 日英語間の翻訳における名詞化の課題

「車内のご案内」のテキスト分析の事例では、日本語での名詞化を英語に翻訳する場合を論じてきたが、逆に英語での名詞化を日本語に訳出する場合の翻訳上の問題点を指摘する事例については枚挙にいとまがない。英文法の参考書や翻訳に関するノウハウを指南した書籍などでは、必ずと言ってよいほど、日本語として自然に訳出するコツとして、「解きほぐした表現」が推奨されている(伊藤: 1979、江川: 1991、安西: 1995、平子: 1999 など他多数)。名詞文から動詞文へと読みほどこいて翻訳するのを例外なくよしとしているのである。このような指摘に対してこれまで誰も異議を唱えることがなかったのも不思議である。SFL での文法的比喩の分析を踏まえて、日英翻訳における言わば「常識」のひとつをここで少しだけ修正しておきたいと思う。

名詞化については、翻訳者を主な対象としない学習参考書においても広範に取り上げられていることからわかるように、一般の英語学習者にとっても英文解釈上重要なポイントである。江川(1999: 30-36)では、英語での名詞構文の訳し方について「直訳」と「還元訳」を提示し、解きほぐした訳出である後者が好ましいとしている。また、翻訳上の問題としては、安西(1995: 25-66)や平子(1999: 116-117)が議論している。平子は「名詞文は日本語としては言葉が固い」し、「概念用語が次々と続く速度が、日本語としては不自然」であると述べている。安西は「無生物主語」の訳出の仕方としても解説しており、「日本語の発想法に従った自然な訳文」として、英語の名詞化は日本語では副詞節などに読みほどこいて翻訳するのをよしとしている。

伊藤（1979: 129-130）は、“The doctor’s careful examination of the patient brought about his speedy recovery”における“examination”を中心とする名詞化の表現に注目し、「医者が患者を注意深く診察したおかげで、患者はどんどんよくなった」と訳例を示して、「医者の患者の注意深い診察」などと訳出しては「日本語と言いがたい」としている。同感である。しかし、コンテキスト次第では「医師の患者に対する慎重な診察が回復を早めた」などとすべき場合もあるのではないだろうか。学術論文であれば、日本語においてもこのような表現が適切であろう。また、動詞文を FACT として「コト化」して主題構成を維持するという中間体も考えられる。「医者の患者の注意深い診察」が日本語と言いがたいのは、口語的な語彙をそのまま流しこんだような稚拙な悪訳が問題なのである。これは日本語での名詞化とは次元の異なる問題である。さらに、伊藤は逆に英語に訳出する際には、“As the doctor examined him carefully, the patient recovered speedily.” とするよりも、「圧縮した」先述の英文が「英語らしい表現」としている。はたして、常にそうであろうか。言語の使用域を考慮すると後者のほうが適切な場合も想定される。たとえば、友人同士の会話などはどうであろうか。英語においても、口語では意味と語彙文法が一致した表現が使用されるのがデフォルトである。

以上をまとめると表 6 のとおりである。

	英語	日本語
一致した表現 Congruent	As the doctor examined him carefully, the patient recovered speedily.	医者が患者を注意深く診察したおかげで、患者はどんどんよくなった。
「コト化」表現 (中間体)	The fact that the doctor examined the patient carefully brought about his speedy recovery.	医師が患者を慎重に診察したことが早期回復につながった。
文法的比喩表現 Metaphorical ??	The doctor’s careful examination of the patient brought about his speedy recovery.	医師による患者に対する慎重な診察が回復を早めた。 医者 <small>の</small> 患者 <small>の</small> 注意深い診察が早い回復をもたらした。

表 6：一致した表現、文法比喩的表現、その中間体の比較

名詞化は文法的比喩として選択された意味のしかたであったはずである。他方で、システムとしては意味と語彙文法が一致した形式 (“congruent”あるいは“unpacked”「解きほぐした」表現形式)があるにもかかわらず、テキストのなかでは名詞化が用いられている理由を無視することはできない。感覚的に「自然な日本語」や「英語らしい表現」と言っても、その根拠が説明できないのは、テキスト全体の使用

域や主題構成が視野に入っていないからである。コミュニケーションを成立させるために意味を伝えることが重要であるのは間違いないが、その意味が形式としても具現されていることを忘れてはならない。しかし、誤解のないように補足するが、筆者は個々の言語固有の好みや傾向を否定し、表面的な形式のみに忠実なごちない「直訳」を決して推奨するものではない。レトリックについて日本語と英語を比較した後で述べた池上（1995: 256）の次のことばが、文法的比喩の選択においてもそのまま適用できるであろう。

問題となる点とは、個々の言語にはそれぞれの好みがあるということである。その結果、どの形式も可能であると言っても、すべての形式が同じような頻度と互いに並行した使用範囲を示すような形で認められるとは限らないのである。

6. おわりに

翻訳における「理論と実践」というフレーズには、「等価」の議論と同様に両刃の剣となりうる危うさがある。定義があいまいで誤解が生じやすいのである。たとえば、翻訳理論に基づいて実践をすることが、即、翻訳技術の上達につながるという幻想や、あたかも「翻訳のコツ」が学校で教えられるというような発想も誤解からではないかと思う。また、翻訳者の経験則を理論と誤解する場合もある。経験則から導き出された「翻訳のルール」で、なぜそうなるかをきちんと説明できないのは、言語学理論とのはっきりとした相違である。

翻訳の理論研究とは無関係に、古今東西にすばらしい上質の翻訳作品が存在するのも事実である。そのような質の高さとは何であろうか。山岡（2001: 106-161）も指摘するように、「原文の意味を伝える翻訳」のためには「内容を理解する技術」が必須である。では、内容理解とは何であろうか。テキストの作り出す意味には3つのメタ機能があり、内容理解は単に命題的な意味の理解で完結するものでない。誰に対してどのように意味を構成していくのかというところまで、翻訳者の選択は要請されるのである。

翻訳者のさまざまな選択の結実としての翻訳作品は言語テキストの探検にうってつけである。もちろん、道に迷わないためには地図や羅針盤が必要であろう。SFLはそのような有用なツールのひとつであると筆者は考える。

著者紹介：長沼 美香子（NAGANUMA Mikako）広島大学大学院（国際学修士）、オーストラリア・マッコーリ大学大学院（M.A.）修了。通訳・翻訳者、大学講師。選択体系機能言語学（SFL）をベースとした翻訳理論研究を発展させて、大学での翻訳教育の可能性を追究している。

連絡先: mikako@katch.ne.jp

【註】

- 1) “And I did not translate them as an interpreter, but as an orator, keeping the same ideas and forms, or as one might say, the ‘figures’ of thought, but in language which conforms to our usage. And in so doing, I did not hold it necessary to render word for word, but I preserved the general style and force of the language.” (Cicero 46 BCE/1960 CE: 364)
- 2) ISFC 32 (International Systemic Functional Congress) が、“Discourses of hope” という大会テーマのもとで、2005年7月にシドニー大学で開催された。基調講演者が率いるワークショップのひとつでは言語類型論と翻訳の問題が討議された。また、発表として、筆者は日英語間の翻訳における名詞化について論じたが (Naganuma 2005)、他にスペイン語、ポルトガル語での主題－題述展開と翻訳との問題を取り上げたものなどもあった。
- 3) TRANSITIVITY、MOOD、THEME などと大文字で表記した場合は、選択体系としてのシステムを意味する。しかし、以下のテキスト分析で「主題」とするのは、主題－題述 (Theme-Rheme) 構造でメッセージを伝達するための要素である。
- 4) 「トピック」は経験構成的要素である話題的主题 (topical theme) である。SFL での多重主題 (multiple theme) は、テキスト形成的、対人的、経験構成的主題 (話題的主题) を含む (Halliday: 1994, Halliday and Matthiessen: 2004)。

【参考文献】

- Caffarel, A. et al. (2004). *Language Typology*, Amsterdam: John Benjamins.
- Baker, M. (1992). *In Other Words: A Coursebook on Translation*, London and New York: Routledge.
- (ed.) (1998a). *The Routledge Encyclopedia of Translation Studies*, London and New York: Routledge.
- (1998b). ‘Translation studies’, in Baker (1998a), pp. 277-80.
- Bell, R. (1991). *Translation and Translating: Theory and Practice*, London and New York: Longman.
- Butt, D. et al. (2000). *Using Functional Grammar: An Explorer’s Guide, 2nd edition*, Sydney: Macquarie University.
- Cicero, M. T. (46 BCE/1960 CE). ‘De optimo genere oratorum’, in Cicero *De inventione, De optimo genere oratorum, topica*, translated by H. M. Hubbell, Cambridge, MA: Harvard University Press; London: Heinemann, pp. 347-73.
- Halliday, M.A.K. (1994). *An Introduction to Functional Grammar, 2nd edition*, London, Melbourne and Auckland: Edward Arnold.
- Halliday, M.A.K. and J.R. Martin (1993). *Writing Science: Literacy and Discursive Power*, London and Washington, DC: Falmer Press.

- Halliday, M.A.K. and C.M.I.M. Matthiessen (2004). *An Introduction to Functional Grammar, 3rd edition*, London: Edward Arnold.
- Hatim, B. and I. Mason (1990). *Discourse and the Translator*, London and New York: Longman.
- Kenny, D. (1998). 'Equivalence', in Baker (ed.) (1998a), pp.77-80.
- Lassen, I. (2003). *Accessibility and Acceptability in Technical Manuals*, Amsterdam: John Benjamins.
- Matthiessen, C.M.I.M. (1995). *Lexicogrammatical Cartography: English Systems*, Tokyo: International Language Sciences Publishers.
- (2001). 'The environments of translation', in Steiner and Yallop (2001), pp. 41-124.
- Munday, J. (2001). *Introducing Translation Studies: Theory and Applications*, London and New York: Routledge.
- Naganuma, M. (2000). *Thematic Challenges in Translation between Japanese and English*, Macquarie University: M. A. dissertation.
- (2005). 'Nominalization in translation between Japanese and English', A paper presented in ISFC32, Sydney University.
- Newmark, P. (1981). *Approaches to Translation*, Oxford and New York: Pergamon.
- Nida, E. (1964). *Toward a Science of Translating*, Leiden: E. J. Brill.
- Simon-Vandenberg, A. et al. (eds.) (2003). *Grammatical Metaphor*, Amsterdam: John Benjamins.
- Steiner, E. and C. Yallop (ed.) (2001). *Exploring Translation and Multilingual Text Production: Beyond Content*, Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- 安西徹雄 (1995) 『英文翻訳術』 ちくま学芸文庫
- 池上嘉彦 (1995) 『<英文法>を考える』 ちくま学芸文庫
- 伊藤和夫 (1979) 『英文法教室』 研究社
- 江川泰一郎 (1991) 『英文法解説』 金子書房
- 長沼美香子 (2005) 「大学における翻訳教育の事例」 『通訳研究』 第5号 pp. 225-37
- 平子義男 (1999) 『翻訳の原理』 大修館書店
- 山岡洋一 (2001) 『翻訳とは何か』 日外アソシエーツ